

「やる気」の源

教頭 長谷川 嘉彦

体育館に鉄棒が設置されました。体育の授業中、子どもたちが技を身に付けようと一生懸命に練習しています。休み時間も鉄棒の周りには多くの子どもが集まって、練習をしている姿が見られます。そんな私も、体育館に誰もいないとき、こっそりと逆上がりをやってみました。逆上がりをしたのは3年振りくらいでしょうか。自転車の乗り方やスキーの技術、ピアノ演奏、逆上がりなどは、一度覚えたら、半永久的に忘れないと言われていました。少しフラフラしましたが、「まだ忘れてないな。体が覚えているな。」と安堵した次第です。

さて、鉄棒の練習を頑張っている子どもに、「どうして、そんなに頑張っているの？」と尋ねると、「逆上がりができるようになりたいから！」という言葉が返ってきました。その子の「やる気」の出どころを知りたくて、「なぜ、そんなにやる気になっているの？」と聞いてみました。「友達ができているから、私もできるようにになりたいんです。」と答えてくれました。

「やる気」には、「おもしろい!」「もっと知りたい!」「もっとできるようにになりたい!」という思いが原動力となって、自分の内側から沸き起こってくるやる気があります。「内発的動機付け」と言います。こういったやる気が高まると、人から言われなくても自分から頑張るようになります。その一方で、「お小遣いがほしいから頑張る!」「欲しいものが買ってもらえるから一生懸命にやる!」というように、報酬を目的として頑張るやる気があります。「外発的動機付け」と言います。報酬があるうちはいいのですが、それがなくなったときにはやる気を維持するのは難しいとされています。

一般的に、内発的動機付けと外発的動機付けとでは、外発的動機付けの方が身に付けるスピードは速いと言われていています。「100点取ったらゲームソフトを買ってあげる。」と言えば、いつも以上に勉強に励む姿が見られると思います。そして、実際に100点を取ることが多いです。一方、身に付けた力を持続できるのが内発的動機付けの特徴です。「逆上がりができたらお小遣いをあげる。」と言われた子どもは、一生懸命に逆上がりを練習します。しかし、できないと「もういいや。」「別にできなくてもいいや。」と言って簡単にあきらめてしまいます。「私も逆上がりができるようになりたい!」と思った子どもは、できるまで頑張り続けます。誰かにやらされているわけでもなければ、やらなければならないわけでもなく、「自分がしたいからする」がやる気の内発的動機になっているからです。

子どもの力を付けるためには、何よりも「やる気」が大事です。やる気になった子どもは、ぐっと力を付けていきます。山田小学校では、子どもにやる気をもたせるために、いろいろと工夫をしています。例えば、子どもが好奇心をもったものを尊重し、すぐに答えを与えるのではなく、「なぜ」「どうして」と考えさせることを大切にしています。「自分で気付く」「自分で発見する」といった喜びを体験させることで、主体的に考える力も身に付けさせていきたいと考えています。ご家庭でも、地域でも、そして、学校でも、やる気に満ちた子どもを育てていきたいです。子どもたちに夢や希望をもたせることも、子どもがやる気になるための一つだと思っています。

ちなみに、脳が記憶していても、すべてが自転車のように昔のようにいくとは限らないそうです。肝心の筋肉や体力がついてこないからだそうです。逆上がりのタイミングを体が覚えていても、重くなった体を持ち上げられないとか、平泳ぎの動きを完全に再現できても、すぐに疲れてしまうとか……。この先も逆上がりができるように、体力や筋力を維持できるようにしていこうと思っています。

